

氏名	おおわだ ひろみ 大和田 裕美		
所属	人間健康科学研究科 人間健康科学専攻		
学位の種類	博士（看護学）		
学位記番号	健博 第 224 号		
学位授与の日付	令和 4 年 3 月 25 日		
課程・論文の別	学位規則第 4 条第 1 項該当		
学位論文題名	妊娠・出産する女性と助産師との関係の成り立ち		
論文審査委員	主査 教授	西村 ユミ	
	委員 教授	安達 久美子	
	委員 教授	河原 加代子	
	委員	榊原 哲也（東京女子大学）	

【論文の内容の要旨】

研究背景

日本における出産は、その 99%が病院・診療所で行われている。妊娠・出産の医療化は、女性が安全に出産することを可能にしたが、他方で、過度な医療介入など抑圧的な出産を経験している女性がいることも明らかにされてきた。女性の妊娠・出産経験や助産師のケア実践には、女性を中心としたケア“woman-centered care”や“being with woman”といった概念を基盤とした女性と助産師との関係が深く関わっている。しかし、それは女性や助産師にとってあまりに日常的なものであるがゆえに、はっきりと意識したり、言語化されたりすることのないままに経験され、いまだ十分に明らかにされていない。このような経験に迫るため、本研究では、現象学とそこから影響を受けて成立したエスノメソドロジーの思想を手がかりとし、はっきりと意識されないままに経験されている女性と助産師との関係がどのように成り立っているのかを明らかにすることとした。

目的

本研究の目的は、妊娠・出産する女性と助産師との関係がどのように成り立っているのかを明らかにすることである。

研究方法

本研究で明らかにしたのは、経験している当の女性や助産師にとってはっきりと意識されないままに、助産ケア実践という活動を成り立たせている、女性と助産師との関係のありようである。こうした経験を浮かび上がらせるためには、女性や助産師にとって意味を帯びて現われる現象そのものだけでなく、その手前でそれを支え、根本において成り立たせ

ているものに目を向けることが必要であった。そこで、本研究では、Husserl が提唱し、意味を帯びて経験されることをその手前の人間の在り方の根本にまで遡ってその成り立ちを明らかにしようとする現象学と、その影響を受け、はっきりと自覚されないままに用いられている人々の方法を明らかにすることを目指して Garfinkel が創始したエスノメソドロロジーの思想を手がかりとした。

研究協力機関は、分娩を取り扱う病院 1 施設と有床助産所 2 施設、無床助産所 1 施設であり、研究参加者は、X 病院に勤務する助産師 5 名および助産所を開業している助産師 3 名とそのケアを受けた女性 11 名であった。調査は、助産ケア実践場面の参与観察と助産師へのインタビューを組み合わせたフィールドワークにより行った。参与観察は、妊婦健康診査場面、乳児健康診査場面、産科病棟入院中の女性への検温場面、自宅出産後の女性への家庭訪問場面など 13 場面で女性と助産師とのやりとりを観察しメモをとるとともに、ビデオカメラを用いて録音・録画した。助産師へのインタビューは、参与観察と組み合わせた 1 回 30 分～1 時間程度の非構造化インタビューを研究参加者 1 名あたり 1～3 回実施し、IC レコーダーに録音し、メモをとった。

分析は、松葉,西村 (2014) の現象学的看護研究やエスノメソドロロジー研究の中でも特に会話について注目する会話分析研究 (串田,平本,林, 2017)、やりとりを会話だけでなく身振り等も含めた相互行為ととらえる相互行為分析研究 (秋谷,2018) を参考に行った。まず、調査時に研究者が記したメモからフィールドノーツを作成し、また、参与観察およびインタビューによって得られた音声データをすべて書き起こしたトランスクリプトを作成した。作成したトランスクリプトを繰り返し読むこと、参与観察で得られたビデオデータを再生し観察することを繰り返しながら、気になることを書き込んでいった。研究参加助産師それぞれのビデオデータの分析とインタビューデータの分析を統合し、女性と助産師との関係がどのようにして成り立っているのかという視点からテーマを探り、テーマごとに女性と助産師との関係の成り立ちを記述していった。

なお、本研究は、平成 30 年度首都大学東京荒川キャンパス研究安全倫理委員会の承認 (承認番号 18110)、および研究協力機関の倫理委員会の承認 (承認番号 2019-09) を受け、令和 2 年度科学研究費助成事業若手研究 20K19139 の助成を受けて実施した。

結果

助産ケア実践場面での参与観察と助産師への非構造化インタビューから明らかになった病院あるいは助産所における女性と助産師との関係の成り立ちが、一人ひとりの研究参加助産師にどのように経験されているのかを記述した。その結果、女性と助産師との関係は、“女性の”、あるいは“助産師の”と明確に区別することができず、互いの経験に互いが含みこまれて成り立つ経験であることが明らかになった。

インタビューにより語られたのは、助産師の視点からみた女性との関係のありようであった。しかし、それは、“女性にとっては”と女性の視点を含みこんで語られるものであり、助産師が語る女性との関係には、助産師が女性とどのように関わるかだけでなく、女性が

助産師とどのようにして関わるかということも含まれていた。参与観察においては、女性と助産師とのやりとりの中で、その場でなされること、つまり女性や助産師の経験が成り立っていることが明らかになった。それは、女性と助産師とが互いに働きかけ合い、応答し合う相互行為によって成り立つ経験であった。参与観察後、参与観察時の女性とのやりとりについて尋ねたインタビューにおいても、助産師は、自身の経験を女性の視点を含みこんで語っていた。

このように、助産師の経験は、助産師自身の視点や関心だけでなく、女性の視点や関心が含まれて成り立つことが明らかになった。このことから、女性と助産師との関係が、助産師にとって自身と区別された“女性”との間に築かれるものではなく、助産師自身と明確に区別することのできない女性との間における経験であることが示された。

考察

女性と助産師との関係の成り立ちには、女性と助産師とが異なる視点を持ちながら互いが互いを成り立たせるといった円環的なあり方で世界の内に〈共に〉あることが関わっていた。こうしたあり方は、互いを自他として区別する以前の状態において経験されるものであり、物理的な時間や空間に区切られながら〈持続する〉ものであった。このように、自他が区別されない状態において〈共に〉あることで成り立つ〈持続〉する交流ができることが、助産師による助産ケアの基盤をなす、女性と助産師との関係を成り立たせていた。